

開館10周年記念

記された想い

～手紙と日記に見る戦中・戦後～

開催趣旨

このたび昭和館では「記された想い ～手紙と日記に見る戦中・戦後～」と題して、平成21年7月25日(土)から8月30日(日)にかけて、特別企画展を開催することとなりました。

戦時中、戦地にいる兵士とその家族が近況を伝えあえる唯一の手段は、手紙のやりとりでした。当時は検閲制度があったため、本心を書くことは難しい状況でしたが、手紙を丹念に見ていくと、家族を思う気持ちだけでなく、手紙には書けない当時の情勢なども感じ取ることができます。

また、日記には戦争の影響で変化していった日々の生活や、終戦後社会が復興してく様子が、そのときの想いととも記されています。

昭和館がこれまで収集してきた多くの手紙や日記等の資料とあわせ、写真や当時を思い出して書かれた絵手紙を展示し、戦中・戦後の生活の様子、人々の想いを紹介いたします。

記

【主催】	昭和館
【会期】	平成21年7月25日(土)～8月30日(日)
【会場】	昭和館3階 特別企画展会場
【入場料】	特別企画展は無料(常設展示室は有料)
【開館時間】	10:00～17:30(入館は17:00まで)
【休館日】	毎週月曜日
【内覧会】	平成21年7月24日(金) 15:00～17:00
【所在地】	〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1
【問い合わせ】	TEL 03-3222-2577 FAX 03-3222-2575
【交通(電車)】	地下鉄【九段下駅】から徒歩1分(東西線・半蔵門線・都営新宿線4番出口) JR【飯田橋駅】から徒歩約10分
【交通(車)】	首都高速西神田ランプから約1分
【ホームページ】	http://www.showakan.go.jp
【その他】	有料駐車場有り(普通乗用車のみ・1時間200円)

展示構成

1 銃後の暮らし

昭和 12 年(1937)に日中戦争が始まったが、人々の暮らしにはそれほど影響は感じられなかった。しかし、身近な人の出征、さまざまな統制の始まりなど、戦争の影響を受けて人々の暮らしは徐々に変化していく。

1 穏やかな日々

日中戦争が始まり、家族や身近な人が出征するということはあったが、銃後の人々の日々の暮らしにはそれほど影響は感じられなかった。

2 変わっていく暮らし（配給、防空演習、学徒動員）



戦争が長期化し、食料品や生活必需品の配給制度が導入され、空襲に備えての防空演習も行われるようになるなど、戦争の影響を受けて変化していった銃後の人々の暮らしを紹介する。

3 親と離れて（学童疎開）

米軍のマリアナ諸島への進攻にともない、日本本土への本格的な空襲の危険がせまった昭和 19 年(1944)6 月、政府は都市部の学童を地方へ疎開させる方針を打ち出した。

親と離れて疎開地で暮らした子どもたちの日々の様子、そして、空襲から子どもの命を護るためとはいえ、幼いわが子を疎開に送り出した親の想いを疎開先の日記、家族でやりとりされた手紙で紹介する。

資料例：配給物絵日記、防空演習についての作文、学徒勤労働員先での日誌
家族で生活について記した短歌ノート、疎開先での日記

	
<p>日記 津田久夫さんの昭和 10 年(1933)の日記。 1 月 21 日に宝塚を見に行き「心の慰安として実によいものだ」と記述している。</p>	<p>はがき 集団疎開で長野県に疎開していた石川靖児さんに家族が送ったもの。家族全員の寄せ書きになっている。 昭和 19 年(1944)8 月 19 日</p>

II 戦地と銃後をつないだ手紙

手紙は戦地の兵士と、離れて暮らす家族が近況を伝えあうことができる唯一の通信手段だった。手紙に綴られたそれぞれの家族の姿を写真やエピソードも交えて紹介する。

※このコーナーではモニターを設置し、手紙・はがきの画像とその朗読で構成した映像を上映する

1 戦地から

戦地の兵士から家族への唯一の通信手段は軍事郵便だった。検閲制度があったため、書きたいことのすべてを手紙に書けたわけではないが、その内容は離れて暮らす家族への想いがこもったものだった。

2 戦地への手紙

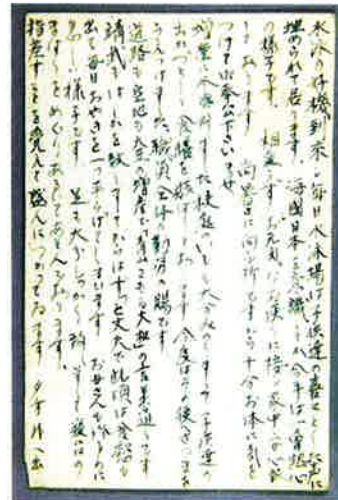
命の保証がない戦地にいる家族に、手紙は残された家族の日々の暮らしを伝え、無事を祈る想いを届けた。

3 ある男女の絆

多くの手紙資料のなかから、婚約中に出征することになったため、離ればなれの生活を余儀なくされた男女（のちに結婚）の手紙のやりとりを紹介する。



はがき（戦地から）
川谷岩一さんが息子の広吉さんに送ったもの。検閲によって塗りつぶされている部分がある。
昭和 18 年(1943)7 月 20 日（消印）



はがき（戦地へ）
東宮もちこさんから夫の武重さんに送ったもの。
昭和 19 年(1944)7 月 8 日（消印）

III 終戦、戦後

昭和 19 年末から東京を始めとする全国の都市への空襲が本格化し、20 年 3 月の東京大空襲を境に住宅密集地への無差別絨毯爆撃が実施されるようになった。戦地だけでなく銃後の人々も死と隣り合わせの生活となった。

昭和 20 年 8 月 15 日に終戦を迎え、戦地や疎開先から家族が戻るなど、人々の生活は徐々に落ち着きを取り戻していった。しかし、なかには終戦後も戦地に行った家族の安否が確認できない人もいた。終戦を迎えた人々の思い、そして戦後の混乱期から復興へと向かう様子を紹介する。

1 家族の安否（空襲、戦死の報告）

空襲が激化するなか、銃後の人々も死と隣り合わせの生活となった。離れて暮らす家族は、空襲の様子やお互いの安否を手紙で確認しあった。

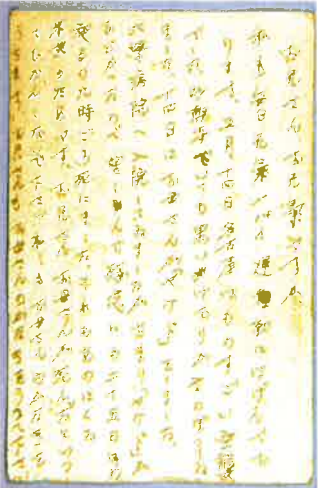

2 終戦

昭和 20 年 8 月 15 日の正午、戦争の終結が「玉音放送」によって国民に伝えられた。終戦を知った人々の思いは、日記や手紙にどのように記されたのか。

3 復興に向けて

戦争が終わり、日々の空襲におびえることはなくなったが、急激なインフレなどにより経済は混乱し、戦中からの食糧不足もさらに深刻なものとなり、人々の生活は苦しいものであった。しかし、戦地や疎開先から家族が戻り、人々の生活は徐々に落ち着きを取り戻していった。

資料例：空襲の様子を知らせる手紙、戦死の状況を伝える手紙、終戦の日の作文、
抑留先からの手紙、

	
<p>はがき 三栗政子さんが兄の一雄さんに送ったもの。母親が空襲で死んだことを伝えている。</p>	<p>はがき 10 年ぶりに教師と生徒が集まり、疎開地を再訪した後、教師が発案者の生徒に送った礼状。</p>
<p>昭和 20 年(1945)5 月 31 日</p>	<p>昭和 29 年(1954)9 月 4 日 (消印)</p>



Ⅳ 戦中・戦後の夏休みの日記

夏休みの宿題とされることが多い日記。戦中・戦後の子どもたちの夏休みの様子を日記等で紹介する。

Ⅴ 伝え残したい記憶

平成21年1月10日から4月30日にかけて、「絵手紙で伝えたい戦中・戦後の記憶」と題し、主催：昭和館、共催：日本絵手紙協会にて絵手紙を募集した。募集期間中、57歳から91歳の方まで161名もの方からご応募いただき、応募総数は391点にのぼった。

家族の出征、食糧事情、学校生活、空襲体験など、体験者だからこそ描ける戦中・戦後の生活、後世代の人々に伝えていかなければならない想いが記された応募絵手紙を紹介する。

	
<p>齋藤正志 (宮城県 68才)</p>	<p>本多和子 (埼玉県 70才)</p>

イベント

会期中、下記の日程でイベントを開催します。

○講演会「シベリアに父を訪ねて」講師：松島トモ子（女優）

日時：平成21年8月23日（日） 14:00～15:30

※当日13:00から昭和館1階ロビーで整理券を配布

会場：九段会館 桐の間

○語り部の会

戦中・戦後の生活の様子を体験者の方々にお話しいただきます。

日時：平成21年8月22日（土） 14:00～16:00

会場：九段会館 瑠璃の間

○夏休み工作教室「絵手紙を描こう！」

日本絵手紙協会から講師を招き、小学生のための絵手紙教室を開催します。

日時：平成21年8月2日（日）、9日（日） 10:30～12:00

会場：昭和館3階会議室

○展示解説

日時：8月1日（土）、8日（土） 各14:00から45分程度

会場：昭和館3階特別企画展会場

【問い合わせ先】

昭和館学芸部 03-3222-2577

担当：渡邊・佐藤